



1 / 酒井さんが「べーべーべー」と呼べば、母親羊たちも「べー」と鳴いて近づいてきます。2 / 羊小屋など「羊まるごと研究所」にある建物は、すべて酒井さんが一人で造っています。3・4・5 / 警戒心の強い羊は、人と人との間を勢いよく飛び跳ねて逃げます。でもこんなにぴょんぴょんと飛び跳ねるのは珍しいとのこと。



研修生の長谷川耕史さん

酒井さんの牧場には、今年の4

農的な暮らしをしたい

私は商売をしたくて羊飼いをやっていてではなく、農業をやりたいのでこの仕事をしています。質を良くしたいとは思いますが、牧場を大きくしたいとは、これまで一度も思ったことはありません。大切なことだと思えます。私は商売をしたくて羊飼いをやっていてではなく、農業をやりたいのでこの仕事をしています。質を良くしたいとは思いますが、牧場を大きくしたいとは、これまで一度も思ったことはありません。大切なことだと思えます。私は商売をしたくて羊飼いをやっていてではなく、農業をやりたいのでこの仕事をしています。質を良くしたいとは思いますが、牧場を大きくしたいとは、これまで一度も思ったことはありません。大切なことだと思えます。

月から研修生がいます。研修生の名前は長谷川耕史さん(28歳)です。長谷川さんはこれまで「北海道工コビレッジ推進プロジェクト」という余市町にあるNPO法人に勤めていました。長谷川さん(以下、長谷川)エコビレッジ推進プロジェクトは、簡単にいうと『人と環境にやさしい暮らしを広めていこう』という活動をしています。そこにも草刈要員として羊を数頭飼っていました。私は野菜などを育てる仕事をしながら羊の世話係もしていました。そこで働きながら、自分の将来のことを考えたとき、このままNPO法人にいては、なく『自分の力で何かをやりたい、羊のいる生活をこれからも続けたい』と思ったんです。そのことを十勝で羊飼いをしている方に話したら「じゃあ、酒井さんのところへ行って話を聞いてみたら」と、酒井さんを紹介していただきました。酒井 だいたいの方は「どこかで雇ってもらえませんか」って、誰にどうやって依存したらうまくいくだろうか、ということをもっと先

白糠町に来たのは人との縁

帰国後はモンゴルでの生活経験を生かし、白糠の茶路めん羊牧場(武藤浩史代表)で実習生として働きました。

酒井 武藤さんとは、私が学生時代からの知り合いで、武藤さんの牧場へよく足を運んでいました。帰国後、羊飼いになるなら実践を積んだ方がいいと思い、武藤さんのところでお世話になったんです。武藤さんの牧場で働きながら、牧場をやる場所を探していました。その頃、当時農業委員だった金澤祐悦さんが「できればうちの地域に住んでくれないか」と、声を掛けてくださったんです。あの頃は『羊飼いでいいだけ、受け入れてくれる町が本当に少なかったんです。羊を飼ってどうやって生活していくんですか』と聞かれて、その人を論破しなければ先へ進めないという感じでした。そんな中、白糠町では武藤さんが羊を飼っていたこともあり、羊飼いの理解がありました。また、金澤さんや竹田公男さんですとか、

川島地域の方はもちろん、たくさんの方が親身になってくれたんです。こうした人との出会いがあったので、白糠町で牧場を開くことにしました。

健康な母親の羊を育てる

酒井さんが飼っている羊の頭数は母親の羊で120頭、仔羊が生まれると400頭の羊を飼うことになり。この数は、20年前からずっと変わっていません。そこには酒井さんのこだわりがあります。

酒井 羊飼いでいいのは、お肉と

なる仔羊にいろいろな餌を食べさせて、おいしい肉を作るといのが仕事ではなく、健康な母親の羊をきちんと育てることが仕事なんです。母親の羊は次の年も仔羊を産み、毛もとれてという循環を繰り返します。循環による生産はまさしく農業生産です。ね。対して、仔羊を育てておいしい肉を作るといのは、加工業の生産なんです。羊飼いは農業。羊を育てることがとても大切です。畑で例えると、母親の羊は「土」なんで